

メイントピックス

ジャパンファウンデーションは、世界各地で、いま人々が抱えるさまざまな課題について、国境や世代を越えた人々の対話・交流の場を設けています。また2004年度は日米関係が始まって以来、150周年の記念の年でもあり、様々な催しが開かれました。そのほか、現地で活躍する派遣専門家や招へいフェローのコメントも交え、「日本研究・知的交流」分野における生き生きとした活動の模様をご紹介します。

日中韓次世代リーダーフォーラム

北東アジアをリードする、次世代のリーダーたちによるフォーラム。

北東アジアをリードする日本、中国、韓国の3カ国における将来のリーダーたちによる交流の場を設けることによって、信頼関係の強化を図り未来へつなげる強固な人間関係を築きあげる目的も込めて、2002年より「日中韓次世代リーダーフォーラム」を実施しています。

2004年には、韓国国際交流財団や中国現代国際関係研究院と共同で、第2回フォーラムを開催しました。3カ国の政界や官界、財界、学界、メディア界などから計14名(日本・韓国から5名ずつ、中国からは4名)が参加。ソウル・北京・福岡をグループで訪問し、参加者同士によるディスカッションや各国有識者との幅広い意見交換、さらにそれぞれの国に特徴的な産業の視察などを行ない、知的交流のみならず

人間性の面でも交流を深めました。

参加者はこのフォーラム期間内にもともに行動し議論することを通じて、各国の政治・社会状況に始まり、北東アジア圏としての経済協力体制や北朝鮮問題にいたるまで「東アジア共同体」の可能性について建設的に考え、この地域の向かうべき方向性を含めた共通の認識を持つなど、大変意義のある事業となりました。

本フォーラムの一連の結果については、福岡で開催した公開シンポジウムにおいて「プログレス・レポート」として発表するなど、精力的なアピールも行なわれました。また、参加者は昼に行われる公式プログラムのみならず、夜もカラオケをするなどしてオープンに親交を深め、プライベートなことも語り合うほど親しい人間関係を作り出すことができました。

さらに、韓国で開催された今回のオープニングには第1回フォーラムにおける参加者の

一部も参加し、より親密なネットワークづくりを実現することができました。第1回、第2回のフォーラム参加者たちは、フォーラム終了後も有意義なネットワークを維持しており、今後も北東アジアの安定と発展のために、そのネットワークがさまざまな分野で大きく貢献することが期待されます。



福岡でのフォーラム

アジア・リーダーシップフェロー・プログラム

希代のリーダーシップを持つ資質が共通体験のなかでさらに高められる。

本プログラムは1996年より財団法人国際文化会館との共同事業として実施。毎年、アジア諸国において際立ったリーダーシップを発揮している専門家を5~8名選抜し、フェローとして最長3カ月間日本に招待しています。

2004年度は、「アイデンティティ、安全保障と民主主義」というテーマのもと、9月1日から10月30日までにかけての2カ月間をコア・プログラムとし、以下の7人のフェローを招き、さまざまなプログラムを行ないました。

カリナ・アフリカ・ボラスコ(アンヴィル出版事業統括部長、詩人/フィリピン)

キンレイ・ドルジ(Kuensel新聞社専務理事・編集長/ブータン)

フェイ・チュンファン・フェイ(華東師範大学アメリカ研究プログラムディレクター/中国)

ジャムハリ(国立イスラム大学イスラム社会研究センター所長/インドネシア)

チャンドリカ・セバリ・コテゴダ(Women and Media Collective共同代表、ス

リランカ女性NGOフォーラム・コーディネーター/スリランカ)

草郷孝好(北海道大学大学院経済学研究科助教授/日本)

グエン・ヴァン・チン(国立ベトナム大学アジア太平洋研究センター副所長/ベトナム)

肩書きは当時のもの。

プログラムの最初に、各フェローが準備してきた自らの専門領域に関わるプレゼンテーションを順番で行ない、フェロー間での問題意識の共有化を図りました。その後、1回目のフィールドトリップとして、2004年9月8日から11日まで広島と京都を訪れ、平和に向けた取り組みやマイノリティ問題についての視察と議論を実施。2回目のフィールドトリップは、2004年10月4日から8日まで北海道ニセコ町などを訪れ、アイヌ文化や地域開発とNPO活動について見聞を広めました。一方、東京滞在中には、10人以上の有識者を招き、ナショナリズムや多文化共生、企業社会責任に教育問題など多彩なテーマでセミナーを実施し、フェローと日本人知識人との間で活発な意見が交換されました。2004年10月26日から27日には、「Acting Asian : グローバル化する

世界における矛盾と挑戦」というテーマで公開シンポジウムを開催し、2カ月の活動の成果を踏まえて報告。締めくくりに参加した聴衆と熱のこもった議論が交わされました。一部のフェローは、コア・プログラム終了後、滞在を1カ月延長し、各自の個人研究を引き続き行ないました。

本プログラムの最大の特徴は、フェローたちが対話や共通の体験を持つことで、個人的な交友関係を築き、それぞれの問題意識を共有し、価値観を分かちあうことにあります。そして、専門分野を超えた人的ネットワークを形成し、相互の信頼関係の確立を目指すところに存在しています。参加者の一人は、事業終了後の評価アンケートに次のような回答を寄せています。「このプログラムの最良の成果は、これから先に見えてくる。2カ月間で培われた絆をベースに今後、さまざまな共同作業の輪が生まれてくるはずだから。」深い洞察力と優れた指導力をもつフェローたちの人的ネットワークが充実し、文化や価値観の異なる人々が互いの独自性・多様性を尊重し、世界的な諸問題解決に向けた取り組みへとつなげることが期待されます。

中東派遣ミッション / 相互理解とネットワーキングおよび政策対話

相互理解とネットワーク構築を深めることが解決への糸口になる。

2003年に引き続き、2004年9月に、「第2回中東地域文化交流・対話ミッション」をヨルダンとイランに派遣しました(団長:山内昌之東京大学教授)。

「伝統と近代」をメインテーマとするシンポジウムや個別の有識者との意見交換では、各界を代表する有識者たちが集まり、日本の歴史・文化・社会・政治について多角的に論じ、相手国側に対して、総合的な理解を促しました。それと同時に、相互に学び合う大切さを説き、それぞれが関心を寄せる課題へ理解を深め、解決に向けて様々な知恵を出し合いました。

帰国後は、このミッションに対する「報告と提言」を政府に提出したほか、参加したメンバーたちが、各方面で対話の成果を発表しました。

また文明間対話型事業として、2004年5月にはパリ・ユネスコにおいて、日・アラブ・欧州の有識者による文明間対話シンポジウムを共催し、日本人専門家を派遣しました。



第2回中東地域文化交流・対話ミッション
イランでのシンポジウム

2004年7月には、今後の日本と中東の知的交流の担い手間のネットワーク構築を図ることを目的として、東京で中東シンクタンク・セミナーを実施しました。

当日は、2回にわたるミッションの協力機関を中心に、イラン、エジプト、サウジアラビア、チュニジア、ヨルダンのシンクタンク関係者を招いて、日本の大学やシンクタンクなど、知的コミュニティとの間で、相互の機関情報を交換し合い、将来の相互協力に関する構想を討議しました。

このシンクタンク・セミナーのネットワークを核にして、様々な事業が実現に至りました。なかでも、イラクの歴史・アイデンティティをめぐる国際会議(主催:ヨルダン王立諸宗教研究所)や、サウジアラビアなどの中東次世代派遣フェローの派遣(キング・ファイサル・センター受け入れ)などは、その最たるものといえます。



第2回中東地域文化交流・対話ミッション
山下八段による柔道指導(イラン)

政策課題について
有効な方法論を討議すべく
さまざまな取り組みを実現。

重要な政策的課題について具体的に検討し、有効な政策提言を行なう機会、また、優先的課題の設定と有効な取り組みの方法論を討議する機会を設けるため、さまざまな取り組みを積極的に行ないました。

2005年1月、リヤドで開催された第3回日・アラブ対話フォーラムでは、日本・エジプト・サウジアラビアの政財官学の代表が参加し、アラブの社会経済開発、安全保障や文化・学術交流の諸問題、イラクとパレスチナにおける選挙後の国際協力のあり方等に関して忌憚ない議論が行なわれました(日本側座長:橋本龍太郎元総理大臣)。

2005年3月にカイロでは、日本とアラブの政策研究に従事する研究者とジャーナリストが、日・アラブ間の知的交流の優先的アジェンダを設定することを目的に会合が行なわれました。これは、前年の中東シンクタンク・セミナーで協力関係を構築した、エジプトのアル・アハラーム政治戦略研究所との共催で実現したものです。

当日は、日本とアラブ諸国の大学やシンクタンクの研究者が一堂に会し、「グローバルゼーションと国際秩序」、「開発と国際協力」、「安全保障」の3つのテーマのもとで、活発な議論が展開されました。

第2回会合は、2005年度中に日本で開催される予定で、今後の日・アラブ間の知的交流のガイドラインとなるような報告がまとめられることが期待されます。

フェローシップ(人材育成・プロジェクト支援)

日本語の用語とフレーズを主題に
専門家やフェローと議論を展開。

将来の知的交流の発展を担う人材の育成も同時に行なう必要があることから、中東次世代招へいフェローシップと中東次世代派遣フェローシップの2つのプログラムを2004年度より新たに立ち上げました。

すでに日本と中東の間では、地域研究者を中心として活発な研究者の交流が行なわれていますが、両地域間での知的協力と対話のトラフィックにさらに厚みを持たせ、グローバル・イシューや両地域間の共通課題の解決に向けた知的協力・対話を行なう人材とそのネ

ットワーク形成を支援することが狙いです。

中東次世代招へいフェローシップにおいては、招へいする中東の若手研究者同士の関係作りも重要です。そのため、トルコ、チュニジア、イエメン、エジプト、クウェートから、計5名のフェローをグループで招へい。最大3カ月の滞在期間中に2週間のコア・プログラムを設け、日本の政治・経済・社会・文化の専門家による講義やものづくりの現場などのサイト・ビジット、さらには、日本の若手研究者との意見交換などをプログラムの中に取り入れました。

また、ジャパンファウンデーションによる主催事業とは別に、先に挙げたイラクの歴史

とアイデンティティに関する国際会議、日本と中東地域との宗教間対話など、民間機関による知的交流プロジェクトに対しても助成を行ないました。



中東次世代招へいフェローシップ・コアプログラム
イスラム学者でもある森本東大寺管長との懇談

沖縄国際フォーラム - アジア・パシフィック・ユース・フォーラム

沖縄の文化と歴史を背景に、さまざまな角度から問題を提起。

2005年3月14日から10日間の日程で、「平和と繁栄への協働 アジア太平洋地域共同体の形成に向けて」をテーマに、日本を含め18カ国24名のメンバーを集めて、「アジア・パシフィック・ユース・フォーラム沖縄（主催：国際交流基金・沖縄県、協力：財団法人国際文化会館）」を開催しました。

プログラムの前半は、参加者がそれぞれに関心のあるテーマについて発表し、議論を行いました。その後、米軍基地や平和祈念資料館などを訪問、さらに座間味島へ場所を移し、グループセッションも実施しました。3月22日には、沖縄県女性総合センター「ているる」で公開シンポジウムを開催し、グループごとに発表。グループ1は、「安全保障と信頼醸成」をテーマに、沖縄の地理的戦略性と独自の文化的背景から、沖縄がこの地域の

「カタリスト」として、地域の未来に貢献していく可能性を示唆しました。グループ2は、「持続可能な発展」を主題として、メコン川流域の開発や東アジアの開発を例に挙げ、経済発展と環境、人間開発のバランスを取っていくことの重要性について述べた上で、市民の代表による地域サミットを行なうべきとの提案がありました。グループ3は、「文化とアイデンティティ」をテーマとして演劇風のプレゼンテーションを行ない、固有の文化のメタファーとしての「泡盛」の消滅を例えに、個人や民族のアイデンティティが変質する有様を象徴的に描きました。

シンポジウムの最後は、印象的な「沖縄宣言」の以下のフレーズで締めくくられました。

「異なる場所から、さまざまな文化的背景を背負ってここに集まったわれわれは、『多様性の中の団結 (unity in diversity)』をめざす旅を皆でともに歩む道を見つけていかなければならない。」



公開シンポジウムを終えて



座間味島の海岸に流れ着いたゴミを参加者が協力して清掃

グローバル・ガバナンスと国連改革

「グローバル・ガバナンス」を主題に日本と欧州地域の知的交流。

欧州・中東・アフリカ課では、日本と欧州地域によるグローバルな課題の共通理解と解決に資する事業を主催、助成しています。

2005年1月13日から14日には、総合研究開発機構（NIRA）とベルギーのシンクタンクである欧州政策センター（European Policy Centre）との共催により、「第1回 日-EUシンクタンク円卓会議」を都内会場で開催しました。

この会議は、日本と欧州の専門家や研究者

たちが、両地域が共通して直面する課題や国際的問題に対して、知識と経験を分かち合い問題解決のために政策提言を行なうことを目的に企画されたものです。

第1回となる今回の会議は、「グローバル・ガバナンス」を主要テーマとして、日本とEUから約20名の学識経験者や政策アナリストが参加。2日間に渡る円卓会議の初日には、2004年12月に公表された国連アナン事務総長の要請によるハイレベル委員会の報告書の提言内容を分析すると共に、国連改革に関する活発な議論が展開されました。

2日目には、グローバル・ガバナンスの構成要素としての国連機関・制度の強化、EUと東アジアの地域協力の役割について、率直な意見が交わされ、さまざまな角度からの提言もなされました。

また、「21世紀の平和と繁栄をどう創るか - グローバル・ガバナンスと国連改革」と題した公開フォーラムも開催。約200名の一般聴衆の参加を得て、明石康元国連事務次長による基調講演に続き、円卓会議参加者がパネルディスカッションを行ないました。

円卓会議の要旨と政策提言は、報告書としてまとめられ、研究機関や政官界関係者などに広く配布されています。また、「第2回 日-EUシンクタンク円卓会議」は、2005年11月にベルギー、ブリュッセルで開催される予定です。

「知的交流会議等開催助成」プログラムでは、日本や欧州地域で開催された37件の国際会議に対して助成を行ないました。

2004年度は、日露戦争100周年を契機に、この戦争が起こった歴史的観点からの分析や、国際政治上においての意義を見直す会議が複数見られたことが特徴です。

このほか、社会保障制度の比較、拡大EUと日本・アジアの関係、地方分権、アーツマーケティングなど、幅広い分野の知的交流事業を支援しました。



グローバル・ガバナンスと国連改革をテーマに活発な議論を交わす日欧の専門家

派遣教員のコメント : 1

福島安紀子 クウェート大学社会学部政治学科客員教授/総合研究開発機構 主席研究員

クウェートの豊かな伝統と文化を継承しつつ日本を学ぶ姿勢に感銘。

2005年3月、女性参政権可否の議論に沸くクウェート大学で国際関係論の講義を担当しました。クウェート大学には日本研究講座はまだ正式には設けられていません。しかし、学生達は「日本は憲法9条改正で帝国をめざしているのか」、「日露領土問題はなぜまだ解決しないのか」等、目を輝かせて矢継ぎ早に質問してきました。最終講義の時に「先生への感謝

の気持ちだ」とクウェート産の香水をプレゼントしてくれた学生達は、イラクに侵攻された後、クウェートはアイデンティティに悩んでいると打ち明け、完全に西洋化せず、豊かな伝統・文化を保持しつつ近代化した日本への憧憬と、日本から学びたいという気持ちを強く持っていました。小津、周防、黒澤映画を鑑賞し、映画論を述べる学生もいました。イスラム教の習慣に戸惑いながらも、クウェート人学生にこたえるものをしっかり創っていきたいと思いつつ、クウェート大学を離れました。



福島先生を囲むクウェート大学の学生と教員達

派遣教員のコメント : 2

岡本由美子 同志社大学政策学部教授/アルゼンチン・ラプラタ国立大学国際関係研究所日本研究センターに派遣

東アジアの経済発展に関する講義からアルゼンチンとの知的交流を。

ラプラタ国立大学国際関係研究所日本研究センターで、東アジアの経済発展に関する講義を行ないました。同センターは、日本の社会、文化、言語をアルゼンチンに普及させようと、非常に意欲的に事業に取り組んでいます。日本研究関係の学生や研究者の交流も国籍を問わず盛んで、熱心に日本語を学んでいる学生が多く見られます。残念ながら、アルゼンチ

ンには、日本研究センターがほかに存在しないと聞いており、現在のアルゼンチンは、中国への関心が高まっているようです。これは、高度経済成長に伴って、市場としての中国の魅力が高まっているからにほかなりません。しかし、アジア諸国に明るいアルゼンチンのエコノミストは、アジアにおける日本の重要性は、依然、十分認識されていると分析しています。私も同様に、この日本研究センターを通じて、アルゼンチンと日本の知的交流がますます盛んになることを願っています。



受講した大学院生たち

招へいフェローのコメント : 1

アシヨク・チャウラ(インド) National Institute of Science Communication & Information Resources

日本語の用語とフレーズを主題に専門家やフェローと議論を展開。

日本研究・知的交流部が年に10回ほど開催しているフェロー勉強会は、日本研究フェローシップ・プログラムで来日しているフェローが、日本での研究成果の発表をし、専門家や一般の方々との意見交換とネットワーキングを行なうことを目的としています。私は2005年3月の勉強会で、「翻訳についての諸問題と翻訳サポートシステム」と題して、日本

語の用語とフレーズに重点を置いた発表を行ないました。当日は、言語学、翻訳、文学などの専門家や来日中のフェローが20名以上参加して下さり、活発な議論が展開されました。4か月間の滞日中に、立命館アジア太平洋大学で、「日印語構成要素レベルの対照研究と言語構成要素の複合語での働き」について研究していた私にとって、この勉強会は、日本での研究成果の集大成となりました。(なお、フェロー勉強会は今後も開催予定。詳細日程などは、ジャパンファウンデーション

のホームページをご覧ください。)



フェロー勉強会での発表の様子

招へいフェローのコメント : 2

ノーマ・フィールド シカゴ大学東アジア言語文明学科教授

小林多喜二の探求で発見した日本独特の民間研究者の層の厚さ。

2005年1月11日から8か月間の予定で来日し、「生きている日本プロレタリア文学の遺産：小林多喜二の100年」をテーマに研究しました。実際に、多喜二が活躍した小樽に住み、彼の母校、小樽商科大学(旧小樽高等商業学校)で、多喜二文学を取り上げた授業に参加したり、同年2月20日に開催された多喜二祭(小樽)で基調講演を行ない、日本民主

主義文学会札幌支部の『多喜二研究』創刊40周年記念講演、さらに、釧路や東京でも講演を行ないました。特に印象的だったのは、多喜二の出身地である大館市(秋田県)をはじめとした地域の民間研究者の層が厚く、今なお、「地元作家」多喜二の研究が脈々と続けられていたことです。また、外国から来た私が多喜二を探求することにより、これまで多喜二に関心がなかった人たちも興味を持つようになってくれたことは大変貴重なことだと実感しました。



小林多喜二墓前祭